ビッグ５性格特性とロールシャッハ検査の関連性
～「SumC」「H%」「F%」「FM」「R」指標を通して～

The relationship between Big-Five personality trait and Rorschach test.
－Through "SumC","H%","F%","FM","R"－

林　　智　幸

問題

性格の層構造と本研究の目的　ある人物が生来の本性としては「怠惰」であっても、自分を内省した結果「勤勉」な性格を強い意志に基づき目指して、ある程度その性格要素を獲得できたとしよう。この場合、生得的な怠惰が消去されて勤勉になったと考えるよりは、怠惰な性格要素と勤勉な性格要素の２種類を持つようになったと考えるのが妥当だろう。

この考え方は性格の層構造を前提にしている。宮城（1960）によると、人の性格は４層構造をしており、最も深層的な部分が「気質」、とされ、その後に「自我」「態度」「役割」と表面的な部分へと配置されている。また、この４層を広義の性格層と考えるならば、気質と自我が狭義の性格層と考えられる。気質は衝動的性格層、自我は意志的性格層と考えることができる（なお、性格の層構造における「自我」と精神分析学における「自我」とでは意味が異なる）。

この２層についてはどのような関係性があるのか？　先の例のように、気質的性格を受容できなかったため自我的性格として反対の性格の獲得を目指そうとするならば、両者の関係は負の関係性となる。逆に、自分の気質的性格を好意的に受容しているのならば、むしろ気質的性格に沿った形で自我的性格を強化するとするならば、両者の関係は正の相関性が見られる。しかし、教育的観点から獲得すべき「意志的性格」が設定されており、そのような性格を目指すように意志が誘導されているのならば、気質的性格と自我的性格の関係性はあまり見られないと予想される。本研究ではいくつかの性格検査を用いて、また、ビッグ５性格特性論の枠組みを使って、性格の２層の関連性を検討する。

性格検査の種類　多くの性格検査を分類する場合、主に意識的な性格層を検査するとされる質問紙性格検査法と、主に無意識的な性格層を検査するとされる投影法という種類のグループが提案されている（なお、その他のグループとして作業検査法が挙げられる）。

質問紙性格検査には非常に多くの種類がある。代表的なものとしても、ミネソタ多面的人格目録（Minnesota Multiphasic Personality inventory：MMPI）、YG性格検査（矢田部ギルフォード性格検査）、モーズレイ性格検査（Maudsley Personality Inventory：MPI）、カリフォルニア人格検査（Calofornia Pfychological Inventory：CPI）、EPPS性格検査（Edwards Personal Preference Schedule）、エゴグラム（Egogram）などの伝統的な検査から（例えば、岡堂、1993）、

NEO－PI－R 人格検査（Revised NEO Personality Inventory）、その短縮版であるNEO－FFI人格検査（NEO Five Factor Inventry）、FFPQ（５因子性格検査）、主要５因子性格検査などの本稿の主題の１つであるビッグ５性格特性論に基づく比較的新しい検査を列挙することができる。

投影法にも多くの種類があるが、ロールシャッハ検査（Rorschach Test）、主題統覚検査（Thematic Apperception Test：TAT、絵画統覚検査とも呼ばれる）、文章完成法テスト（Sentence Completion Test：SCT）、バウムテスト（Baum Test、樹木画テストとも呼ばれる）、PFスタディ（Picture Frustration Study、絵画欲求不満検査とも呼ばれる）などが代表的なものとされる（例えば、岡堂、1993）。この検査は、曖昧なあるいは多義的な刺激を被検者に提示するため、一般的に、回答の自由度が高く、実施・得点化・解釈が検査者の技量に依存する部分が大きい。そのため、近年では信頼性・妥当性の観点で疑問視されている（杉浦、2016）。

ビッグ５性格特性論　本稿では質問紙性格検査と投影法についてビッグ５性格特性論の観点からその関係性を検討することを目的とする。ビッグ５性格特性論（以降「ビッグ５論」）論とは、人の性格の特徴は主要な５特性によって説明可能であるとする性格特性論の一種である（辻、1998；村上・村上、1999）。かつては性格に関するさまざまな理論や研究知見を包括的観点から整理するための「性格研究における共通言語」として期待されていたが、現在ではこのような期待は過剰であると批判されている（若林、2009）。しかし、完璧な理論ではないにしろ、未だに有効な理論の１つであることは間違いない。

ビッグ５論は、性格形容詞などの性格記述語の分類を目的とする性格語彙研究と、特定の性格理論に基づく性格質問紙検査の開発を目的とする性格質問紙研究の２つの流れから誕生した（山田、1998）。いずれもAllport & Odbert（1936）の研究が発端となっており、それが1990年代になり合流してビッグ５論が本格的に認識・普及していくことになる。語彙研究においては、Norman（1963）が「高潮性」・「協調性」・「誠実性」・「情緒安定性」・「教養」を、Peabody & Goldberg（1989）が「権力」・「愛情」・「仕事」・「情緒」・「知性」の５因子を抽出した。質問紙研究においては、Tupes & Christal（1961）が「高潮性」・「協調性」・「信頼性」・「情緒安定性」・「文化」を、Digman & Takemoto－Chork（1981）が「外向性」・「協調性」・「良心性」・「神経症傾向」・「経験への開放性」の５特性を抽出した。

２つのアプローチが1990年代に合流してビッグ５論に基づく性格検査が開発されるようになった。例えば、Costa & McCrae（1992）のNEO－PI－R、辻（1998）のFFPQ、村上・村上（1999）の主要５因子性格検査が挙げられる。このように現在では代表的な性格特性論としてビッグ論は注目されており、５特性の具体的な名称については研究者によって若干異なるものの、その内容は本質的に同じと考えることができるだろう。本研究では、主要５因子性格検査を主軸として考察を行うため、村上・村上（1999）の「外向性」・「協調性」・「勤勉性」・「情緒安定性」・「知性」の名称を基本的に使用する。

主要５因子性格検査　村上・村上（1999）により開発され、ビッグ５論に基づく質問紙性格検査の中でも信頼性と妥当性が高い検査であることが報告されている（村上・村上、2001）。信頼性に

おいては、ビッグ５性格特性を測定する尺度における再検査による信頼性が0.87〜0.95の範囲をとり、いずれの特性においても高いことが示された。妥当性においては、ゴールドバーグの５因子のチェックリストとの基準関連妥当性を調べたところ、外向性が0.84、協調性が0.78、勤勉性が0.76、情緒安定性が0.72、知性が0.72などと、いずれの特性においても高いことが示された。この検査は全70項目あり、受検態度を調べる項目以外に、１つの性格特性の内容を12項目で測定するため内容項目は60項目用意されている。

外向性は、「どちらかというと、おとなしい性格です」「どちらかというと無口です」などの項目で測定される。高得点の解釈は「外向性：社交的で、外向的で、社会的な流行や変化にも敏感で、知人や友達が大勢できる。ただ、人間関係は上辺だけの付き合いになりがちで、物事を積極的に押し進めることがある」とされる。

協調性は、「誰にでも親切にするように心がけています」「人助けのためなら、やっかいなことでもやります」などの項目で測定される。高得点の解釈は「正直で、気前がよく、暖かく、誰にでも親切である。他人の感情を敏感に察して、相手の立場で考える。しかし、他人を優先しすぎて、自分の気持ちや生き方が犠牲にされることもある」とされる。

勤勉性は、「何かに取り組んでも、中途半端でやめてしまうことが多い」「どちらかというと徹底的にやる方です」などの項目で測定される。高得点の解釈は「責任感が強く、注意深く、実際的な感覚に恵まれている。何事にも精力的、徹底的に取り組む。お金や物を無駄遣いしない。ただ、細かいことにも気づくので、周囲の人に小うるい印象を与える」とされる。

情緒安定性は、「他の人と比べると、あれこれ悩んだり、思いわずらったりする方です」「くよくよ考え込みます」などの項目で測定される。高得点の解釈は「情緒的に安定していて、生活には満足している。一般的に有能で、困った問題が起きても冷静沈着に対処できる。相手の感情には敏感で、滅多に人を嫉妬しない」とされる。

知性は、「他の人と比べると、事の本質が見抜ける方です」「いろいろな問題や事柄から共通した性質を見つけだすのは、他の人より得意です」などの項目で測定される。高得点の解釈は「好奇心が旺盛で、広範囲の情報を知ったり、体験することに強い関心がある。困った問題が起きても、冷静沈着に対処できる。先のことが見通せるので、困った問題が起こっても冷静に対処できる」とされる。

ゴールドバーグのSD尺度　Goldbergは日常生活で使われる自然言語をビッグ５論の観点から研究を進めている。多くの語彙を整理して、ビッグ５性格特性の意味を典型的に示す形容詞を抽出するという方法を採用した。Goldberg（1992）は最終的に100語の形容詞を提案しており、他の研究者にもよく利用されている。さらに、彼は形容詞70語を対にしたチェックリストも作成しており、こちらの方が100語バージョンよりもきれいな５因子を抽出される。

村上・村上（2001）では、このGoldbergのチェックリストを５因子版SD法として活用できるように具体的な形容詞ペアと評定方法を例示している。すなわち、形容詞ペアについては、各性格特性ごとに７形容詞ペアが用意されている。例えば、外向性は「外向的－内向的」「精力的－精力的

ではない」、協調性は「暖かい－冷たい」「親切－不親切」、勤勉性は「計画性のある－気まぐれ」「責任感のある－無責任」、情緒安定性は「平静－憤慨」「弛緩－緊張」、開放性は「知性的－知性的でない」「分析的－分析的でない」などである。また、回答方法として、SD法として利用できるように、「非常に」「かなり」「やや」「どちらでもない」などの程度を考慮した７段階の評定法が例示されている。ただし、本研究では「非常に」「少し」「どちらでもない」と組み合わせた５段階の評定法を採用した。本研究では、この方法を「ゴールドバーグのSD尺度」と呼ぶ。

ビッグ５論から推測するロールシャッハ検査の指標　ロールシャッハ検査とはスイスの精神科医Hermann Rorschachによって創始された10枚のインクプロットを使った投影法の一種である。ロールシャッハ検査はどのようにデータ整理・分析するかでいろいろな流派があり、アメリカで代表的なものとして６種類ある（村上・村上、1988）。Bech、Hert、Klopfer、Piotrowski、Rapaportら、そしてExnerの方法である。現在最も注目を浴びているのがExnerの方法であり、この方法は1950年に確立した上記のExner以外の５種類の方法を再検討した「ロールシャッハ包括システム」（The Comprehensive System）として知られている。

日本ではKlopferを基本とした片口安史が考案した「片口式」が有名であり、その方法論は『心理診断法』（片口、1956）として出版され、その後も何度も改訂されていき、日本で大いに普及していくことになる。しかし、村上・村上（？？）によると、日本のロールシャッハ検査研究では実証的な基礎研究が不足していること、検査者のロールシャッハ検査の解釈に恣意性が見られること、などを理由にして、片口法を見直し、また、コンピュータによる「ロールシャッハ自動診断システム」を開発することで、より客観性の高いロールシャッハ検査の運用法を提案している。本研究では、村上・村上（1988）の方法を採用している。

この検査ではいろいろな指標が産出されるが、本研究では、ビッグ５論と関連があると予想される次の５種類の指標について注目する。具体的には「SumC」「Ｈ％」「Ｆ％」「FM」「Ｒ」である。なお、下記の各指標の説明では、村上・村上（1988）、岡堂（1993）を参考にしている。

（Ａ）SumC：この指標は、図版の赤、青、黄、茶などの有色彩を用いた反応（有色彩反応）をどれだけ生じているかを示す。有色彩は人の注目を引きやすいため、易刺激的でしかも反応者の統制が十分ではないなど、外的環境の情緒的刺激に対する反応性の程度と解釈される。

また、RorschachはYungの外向型・内向型の考えを参考にして、人間運動反応ＭとSumCの比率に注目し、Ｍが優位な内向型、SumCが優位な外拡型（外向型に相当）、両者が適度な数の適応型、両者が極端に少ない両貧型、そして両方とも多い両向型を区別した。SumCが外向性と関連が深い指標と考えるのであれば、ビッグ５論において外向性と関連が深い特性として、まさに外向性（外拡型）特性があり、両者には関係性があると予想される。

（Ｂ）Ｈ％：この指標は人間反応の割合を示す。人間が他者と交流して生活しているならば、曖昧な刺激から日常生活に縁が深い人間に関連する内容を連想するのは自然である。そのため、対人関係での成熟性や他人への関心や感受性を示すものと解釈される。以上から、Ｈ％が対人関係性と関連が深い指標と考えるのであれば、ビッグ５論において対人関係性と関連が深い特性として協調

性が挙げられ、両者には関係性があると予想される。

（C）F％：この指標は形態反応の割合を示す。形態反応は、運動・色彩関係に反応せずに純粋な形態にのみ注目しているため、一般的に冷静で客観的な対処の仕方を反映すると解釈される。しかし、この指標が平均範囲を超えて高い場合は反応性や想像性をおさえた統制がされている、平常範囲を超えて低い場合は主観性が強すぎて現実を客観的に見られない傾向があるとされる。以上から、F％が統制性と関連が深い指標と考えるのであれば、ビッグ５論において統制性と関連が深い特性として勤勉性が挙げられ、両者には関係性があると予想される。

（D）FM：この指標は動物運動反応を示す。もともと運動反応は静止しているインクプロット図に動きを見出しているので、人間や動物に対する関心や共感が高いと考えられる。そして、幼い被験者には動物運動反応が多いため、この指標は、未分化で幼児的で衝動と、それだけに生命力に富んだ屈託のない衝動と関連があると解釈される。以上から、FMが衝動性と関連が深い指標と考えるのであれば、ビッグ５論において衝動性と関連が深い特性として情緒安定性が挙げられ、両者には関係性があると予想される。

（E）R：10枚のインクプロット図から回答数の指標である。反応が多いことは、精神活動の活達さ、気分の昂揚、些事への関心、顕示欲などを、少ないことは、精神活動の貧困さ、気分や意欲の沈滞、抵抗や防衛などを反映されるとされ、一般的には知的生産力と解釈される。以上から、Rが知的生産力と関連が深い指標と考えるのであれば、ビッグ５論において知的生産力と関連が深い特性として知性が挙げられ、両者には関係性があると予想される。

本研究の目的　ビッグ５論の枠組みに基づきながら、意識的性格として主要５因子性格検査とゴールドバーグのSD尺度における性格得点とロールシャッハ検査の５指標との関係性を検討する。具体的には、外向性とSumC、協調性とH％、勤勉性とF％、情緒安定性とFM、知性とRの関係性について検討する。

方法

調査協力者と実施方法　心理測定・心理検査を学習する授業に参加した静岡市内の私立大学生を調査対象者とした。３種類の心理検査の回答は授業活動の一環として行われ、研究データとしての提供承諾に同意が得られたものを分析対象とした。なお、ロールシャッハ検査を含めて、３種類の心理検査については学生同士でデータ収集およびデータの整理・分析を行った。

本研究のデータは数年にわたり収集されており、それぞれ測定時期が異なる（いずれの年度も11月～12月にデータ収集を行った）。それぞれの測定時期の調査対象者の人数と年齢は次の通りである。（１）測定時期A：2014年に測定、人数は10人（男性３人、女性10人）、年齢の平均値は21.10（標準偏差0.88）歳であった。（２）測定時期B：2013年に測定、人数は18人（男性４人、女性14人）、年齢の平均値は20.39（標準偏差0.50）歳であった。（３）測定時期C：2012年に測定、人数は24人（男性６人、女性18人）、年齢の平均値は20.83（標準偏差0.82）歳であった。（４）測定時期D：20

11年に測定、人数は17人（男性７人、女性10人）、年齢の平均値は21.12（標準偏差0.93）歳であった。

主要５因子性格検査　村上・村上（1999）により開発されたビッグ５性格特性理論に基づく質問紙性格検査である。全部で70項目から構成されており、受検者の受験態度を調べるとともに、12項目ずつの質問により、外向性得点、協調性得点、勤勉性得点、情緒安定性得点、知性得点が測定できる。

ゴールドバーグのSD尺度　Goldberg（1992）の形容詞100語から抽出した形容詞70語をSD法として使用できるようにしたもの（村上・村上、2001）。性格特性ごとに７形容詞ペアを用意し、本「非常に」「少し」「どちらでもない」と組み合わせた５段階の評定法で回答を求めた。

ロールシャッハ検査　ロールシャッハ検査を実施し、村上・村上（1988）の整理法に基づき得点化を行った。検査結果としては標準的な指標については全て計算したが、本研究では、SumC、H％、F％、FM、Rの５指標の得点のみを分析対象とした。

結果

最初に「主要５因子性格検査」および「ビッグ５のSD尺度」から、それぞれ、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性の得点を求めた。「ロールシャッハ検査」のデータについては村上・村上（1988）の方法に従ってデータ整理・分析を行い、「SumC」「H％」「F％」「FM」「R」の５種類の指標を分析対象とした。

本研究では基本的に相関分析（ピアソンの積率相関係数）を使って分析や仮説の検討を行うこととする。ただし、いずれの測定時期の参加者人数が少ないため、ある程度の相関係数が得られても有意とならない。そこで本研究では有意性検定は行わず、相関係数の「数値」注目して検討を進める。相関係数は一般的に「絶対値0.20」以上であれば（弱い）相関関係があると解釈されるため、「0.20」を判断基準として採用する。しかし、有意性検定を行わない本研究の分析は不完全であることには変わりがないため、本研究の結論夜考察は試論として提案するにとどめる。

表１　「主要５因子性格検査」と「ゴールドバーグのＳＤ尺度」との相関係数

ビッグ５論	外向性	協調性	勤勉性	安定性	知性
測定時期A	0.33	0.26	0.79	0.72	0.65
測定時期B	0.64	0.60	0.66	0.58	0.70
測定時期C	0.74	0.80	0.64	0.79	0.32
測定時期D	0.92	0.70	0.77	0.62	0.46
平均値	0.65	0.59	0.71	0.68	0.53
中央値	0.69	0.65	0.71	0.67	0.55

意識的性格層を測定しているとされる主要５因子性格検査とSD法尺度において対応するビッグ５性格特性の得点間について相関分析を行った。結果を表１に示すが、５つの側面において平均値および中央値において0.50を超えており、比較的高い相関関係が確認された。

主要５因子性格検査とロールシャッハ検査指標において、対応すると予想される得点間の相関係数を調べた（表２）。「外向性」と「SumC」における正の相関、「勤勉性」と「Ｆ％」における負の相関、「知性」と「Ｒ」における正の相関については相関係数の中央値や平均値は絶対値「0.20」を超えており、ある程度の関連性があると判断できる。「協調性」と「Ｈ％」、「情緒安定性」と「FM」については、中央値や平均値が「0.20」以下であり、明確な関係性は確認できなかった。

表２　「主要５因子性格検査」と「ロールシャッハ検査の５指標」との相関係数

ビッグ５論 ロールシャッハ	外向性 SumC	協調性 H%	勤勉性 F%	安定性 FM	知性 R
測定時期A	0.28	-0.09	-0.78	0.35	0.50
測定時期B	0.51	-0.30	0.14	-0.60	0.16
測定時期C	0.25	-0.20	-0.52	0.39	0.57
測定時期D	0.45	-0.13	-0.26	-0.15	-0.15
平均値	0.37	-0.18	-0.36	0.00	0.27
中央値	0.37	-0.16	-0.39	0.10	0.33

SD尺度とロールシャッハ検査指標においても、対応すると予想される得点間の相関係数を調べた（表３）。「外向性」と「SumC」における正の相関、「勤勉性」と「Ｆ％」における負の相関、「知性」と「Ｒ」における正の相関については相関係数の中央値や平均値は絶対値「0.20」を超えており、ある程度の関連性があると判断できる。「協調性」と「Ｈ％」、「情緒安定性」と「FM」については、中央値や平均値が「0.20」以下であり、明確な関係性は確認できなかった。

すなわち、主要５因子性格検査であれ、SD尺度であれ、「外向性」と「SumC」における正の相関関係、「勤勉性」と「Ｆ％」における負の相関関係、「知性」と「Ｒ」における正の相関関係が共通して確認された。また、「協調性」と「Ｈ％」、「情緒安定性」と「FM」については明確な関係が示されなかったことも共通して確認された。

表３　「ゴールドバーグのＳＤ尺度」と「ロールシャッハ検査の５指標」との相関係数

ビッグ５論 ロールシャッハ	外向性 SumC	協調性 H%	勤勉性 F%	安定性 FM	知性 R
測定時期A	-0.23	0.80	-0.84	0.11	0.64
測定時期B	0.43	-0.02	0.27	-0.36	0.48
測定時期C	0.34	-0.23	-0.26	0.42	0.12
測定時期D	0.48	-0.15	-0.17	-0.17	-0.11
平均値	0.25	0.10	-0.25	0.00	0.28
中央値	0.38	-0.09	-0.21	-0.03	0.30

考察

本研究は、ビッグ５論の枠組みに基づきながら、意識的性格として主要５因子性格検査とゴールドバーグのSD尺度における性格得点とロールシャッハ検査の５指標との関係性を検討した。結果、外向性とSumCとの間に正の関係、勤勉性とＦ％との間に負の関係、知性とＲの間に正の関係があることが示唆された。しかし、協調性とＨ％、情緒安定性とFM、これらの間には関係性は見られなかった。以上の結果は、主要５因子性格検査とSD尺度のいずれにおいても共通していた。

外向性と知性については意識的性格と無意識的性格との間にある程度の関連背が示唆されている。より具体的には、気質的に、外向的であったり、知的（好奇心が強い）であったりすると、そのまま強化する方向の自己イメージ（自我）を持ち、意識的性格を成長すると考えられる。そうすると、外向性や知性の性格特性においては、生得的な特徴が成長とともに行動面や自己イメージにも現れやすくなると考えられる。

協調性と情緒安定性については意識的性格と無意識的性格との間に関係性が見られなかった。この結果の解釈として、（Ａ）「協調性とＨ％」「情緒安定性とFM」が関係があるとする仮説が間違っている、（Ｂ）協調性と情緒安定性においては意識的性格と無意識的性格は別側面であるため関係性がないのが当然である、（Ｃ）年齢とともに「生来の気質とは関係なしに、ある程度、他者と交流ができるように、感情をコントロールすることができるようになる」ことが求められるため、気質がどうであれ、そのような求めに応じる形でそのような性格になるように意志が誘導されたため、気質的性格と自我的性格の関係性が表面的には見られなくなった、などが考えられる。いずれが正しいか、あるいは別の解釈が成り立つかは今後の検討課題であろう。

そして、本研究で最も解釈が難しいのが「勤勉性とＦ％の負の関係性」の結果である。予想では正の関係が見られると考えていたが、実際には負の関係が確認された。この報告を素直に受け止めると、生得的に怠惰な性格の持ち主が（その状態に反発して）勤勉的性格を希望するようになる、あるいは生得的に勤勉な性格の持ち主が（その状態に反発して）怠惰な性格を希望するようになった、などの成長像が連想される。このうち、勤勉性が社会的に望まれるため、前者の成長像についてはそれほど違和感がない。しかし、後者の「勤勉な人が、社会的に望ましくない『怠惰な性格』を望む」という成長像については違和感が強く、これを想定することは難しい。

またこの負の相関関係はロールシャッハ検査のデータ整理が適切に行われていることが前提になるが、「Ｆ％」を算出するための「形態反応Ｆ」の判定が必ずしも適切ではなかった可能性もある。本研究ではロールシャッハ検査の初心者である学生がデータ整理をしているが、ロールシャッハ検査をはじめとする投影法は実施・得点化・解釈が検査者の技量に依存する部分が大きい（杉浦、2016）。特に「形態反応Ｆ」は、運動反応や色彩反応ではない、消去法的な基準で判定をする要素が強いため、初心者にはＦの判定が難しく、適切な判定がされていない可能性がある。すると、不適切な判定データに基づく相関分析の結果であったとするならば、「勤勉性とＦ％の負の関係性」についての解釈は、適切な判定ができるロールシャッハ検査の熟達者によるデータ収集をして改めて

の再検討が必要になるかもしれない。本研究の中で最も今後の課題とすべきところだろう。

以上を踏まえると、詳細な結果はともかくとして、主要５因子性格検査とコールバーグのSD尺度とロールシャッハ検査に基づき、意識的性格と無意識的性格との間には何らかの関係性があることは示されたと言えよう。ただし、この結論は、調査協力者の少ないデータであり、さらには有意性検定に基づいていない。今後は充実したデータ収集に基づいた研究により、この結論の妥当性や、本研究で曖昧だった詳細部分についての検討が求められる。

引用文献

Allport, G.W. & Odbert, H.S. (1936). Trait names: A psychological study. *Pschological Monographs*, 47 (1,Whole No.211.)

Goldberg, L. (1992). The development of markers for the big-five factor structure. *Psychlogical Assessment*, 4, 26-42.

宮城音弥 (1960). 性格、岩波書店.

Costa, P. T. Jr., & McCrae, R. R. (1992). *Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R) and NEO Five Factor Inventory (NEO-FFI) professional manual.* Odessa, Florida :Psychological Assessment Resources.

Digman, J. M., & Takemoto-Chock, N. K. (1981). Factors in the natural language of personality: Re-analysis, comparison and interpretation of six major studies. *Multivariate Behavioral Research*, 16, 149－170.

片口安史 (1956). 心理診断法―ロールシャッハ・テスト、牧書店.

村上宣寛・村上千恵子 (1988). なぞときロールシャッハ　ロールシャッハ・システムの案内と展望、学芸図書.

村上宣寛・村上千恵子 (1999). 性格は五次元だった－性格心理学入門－、培風館.

村上宣寛・村上千恵子 (2001). 主要５因子性格検査ハンドブック―性格測定の基礎から主要５因子の世界へ、学芸図書.

Norman, W.T. (1963). Toward and adequate of personality attributes: Replicated factor structure in peer nomination personality ratings. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 66, 574-583.

Peabody, D., & Goldberg, L. R. (1989). Some determinants of factor structures from personality-trait descriptions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 552-567.

岡堂哲雄 (編) (1993). 増補新版　心理検査学－臨床心理査定の基本、垣内出版.

杉浦義典 (2016). 第５章　臨床・障害、子安増生 (編)、心理学 (アカデミックナビ)、勁草書房、169-211.

辻平次郎（編）(1998). 5因子性格検査の理論と実践　こころをはかる5つのものさし、北大路書房.

Tupes, E.C. & Cristal, R.E. (1961). *Recurrent personality factors based on trait ratings* (USAF ASD Technical Report, No.61-97). Lackland Air Force Base, Tex.: U.S. Air Force. (reprinted in *Journal of Personality*, 1992, 60, 225-251.)

山田尚子（1998). Ⅰ－1　特性論と5因子モデルへの収斂、辻平次郎（編)、5因子性格検査の理論と実践－こころをはかる5つのものさし－、北大路書房、3-15.

若林明雄（2009). パーソナリティとは何か－その概念と理論－、培風館.